



う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2022年4月  
第123号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久

また桜を描く事が  
できました



目 次

漢点字の散歩 (60)	(岡田健嗣)	.....	1
点字から識字までの距離 (116)	(山内 薫)	.....	14
わたくしごと	(木村多恵子)	.....	19
漢文のページ		.....	21
ご報告とご案内		.....	23
コラム：「字式」について	(岡田健嗣)	.....	26
編集後記	(木下和久)	.....	27

## 漢点字の散歩（六十）

岡田 健嗣



### カナ文字は仮名文字（11）

私が拙稿を書き始めましたのは、視覚障害者の多くが、現在でも「文字はカナ文字で十分だ」と言っている現状を、何とかもう少し風通しよくしたいと思つてのことです。常識的には、わが国の文字の表記は「漢字仮名交じり」であることは誰も疑つてはおりませんし、実際にそのような文章が日々編まれております。ところが一旦視覚障害者だけの世界に入りますと、たちまちこれが非常識となつてしまします。どのように非常識となるのかと申しますと、ある日うつかり私が、「漢字を知らなければ本が読めないでしょう」と発言したことがあります。それに対して間髪を入れずに「読めない?!」という激しい反発を、何人かの視覚障害者からいただきました。それは実に激しいも

のでした。私は、「漢字仮名交じり」は、ここでは常識ではないのだ、と思わずにはおられませんでした。また後に思つたことですが、そこから受け取れるものは、彼らの漢字を知る機会を得なかつたという現状を必死に隠蔽したいという願望と、「漢字の知識はなくても本は読めている」という、視覚障害者相互の確認への希求の現れなのではなからうかということでした。互いに「漢字を知らなくても本は読めるんだ」と、肩を叩き合い、背中を叩き合つて安心し合いたいという気持ちだが、あの激しい反発として現れたものと思つたのでした。このことは、私が視覚障害者であつて、そこには晴眼者の方はおられなかつたという条件の元に生じた反応であつて、もし晴眼者の方がそこにおられて、私と同じ発言をしたとしますと、どのような反応となるのかも考えてみました。そこでは恐らく誰も声を出すことのないまま時間をやり過ごして、そのような発言はなかつたようにしてしまうのではないか、そんな風に思つたものでした。わが国の視覚障害者が置かれている文字の状況はそのようなところに

あつて、しかも視覚障害者を取り巻く晴眼者の方々も、視覚障害者に文字の知識が大事なのだということをお伝えしようとお考えになる人は極めて僅かしかおられないのが現状です。さらに視覚障害者のいわゆる上層におられる方々から、「カナ文字がありながら、なぜ日本語は、カナ文字だけで書けないのだろうか、誠に先祖様が恨めしい」などという言葉を目にするに及びました。

そこで私は、本会で開始した『萬葉集釋注』の漢点字訳を機に、力には余るとは承知しつつも、日本語の表記の始原とはどんなものかという見方で、「萬葉集」を見ることにしたのでした。

結論を急ぐ訳ではありませんが、一つ言えることがあるのではないかと、私は考えております。素人の権利として恐れることを忘れることにして申しますと、「萬葉集」という歌集は、日本語で書かれた歌集ではないと考えます。

「萬葉集」は日本の最古の歌集で、日本語で書かれた最初の書物だというのが、一般に通用している捉え

方としますと、そうではなく、その前の段階、日本語の表記に至るプロセスを、そのまま跡づけている歌集が、この「萬葉集」だと言えるのではないか、このような考えに至りました。

「萬葉集」は歌集ではありませんが、その後に現れる多くの歌集も同様ですが、歌だけで編まれている訳ではありません。その歌の作者や作歌に関わる情況を記した「題詞」が、先に置かれています。また、補足的な注釈である「左注」が、歌の後ろに置かれています。この「題詞」と「左注」は、決して少ない量ではありません。そしてここにある情報は、その対象とされる歌にとつて、唯一無二と言えるものです。そしてこの「題詞」と「左注」は、漢文で書かれています。言い換えれば「萬葉集」という歌集は、半分は漢文で書かれていて、歌の部分だけ日本語で書かれているということが言えます。さてこの日本語で書かれた歌ですが、全てが漢字によつて書かれているという、現在の日本語文とは全く異なった様相を示すものでもありません。それは誠に無理からぬものがあつて、当時は、

文字と言えば、漢字しかなかったのですから、それは極めて自然な表記ということが言えます。

以下に、何首かの歌を抽出します。

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳  
尔 菜採須兒 家告閑 名告沙根 虚見津 山跡  
乃國者 押奈戸手 吾許曾居 師吉名 倍手 吾己曾  
座 我許背齒 告目 家呼 名雄母 一  
籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岡  
に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね そらみつ  
大和の国は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて  
我れこそ居れ 我れこそば 告らめ 家をも名をも  
こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち こ  
のをかに なつますこ いへのらせ なのらさね そ  
らみつ やまとのくには おしなべて われこそをれ  
しきなべて われこそをれ われこそば のらめ  
いへをもなをも

山常庭 村山有等 取與呂布 天乃香具山 騰立

國見乎為者 國原波 煙立龍 海原波 加萬目立多都  
怜可※國曾 蜻嶋 八間跡能國者 二  
大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山  
登り立ち 國見をすれば 國原は けぶり立ち立つ  
海原は かまめ立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和  
の国は

やまとには むらやまあれど とりよろふ あめの  
かぐやま のぼりたち くにみをすれば くにはらは  
けぶりたちたつ うなはらは かまめたちたつ う  
ましくにぞ あきづしま やまとのくには

「万葉集」の冒頭の歌と二番目の歌です。冒頭の歌は雄略天皇の御製歌と題詞に記されているものです。二番目の歌は、舒明天皇の御製歌と記されています。一番の歌は、菜摘みをしている貴族の姫君たちに向かつて、雄略天皇が呼びかけているものです。自分はこの国を治めている者だと宣言して、そこにいる姫君の一人に求婚しているというものです。

二番目の歌は、舒明天皇が大和三山の一つである香具山にお登りになって、治めておられる大和の国をお眺めになって歌われたもので、「国見歌」と呼ばれるものです。大和の国の民の籠はいつでも煙が立っている、また海には多数の鷗が舞っている、何と豊かな国であろうか、と歌っておられます。

君之行 氣長成奴 山多都称 迎加将行 待尔可将  
待 八五

君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行かむ  
待ちにか待たむ

きみがゆき けながくなりぬ やまたづね むかへ  
かゆかむ まちにかまたむ

如此許 戀乍不有者 高山之 磐根四卷手 死奈麻  
死物乎 八六

かくばかり 恋ひつつあらずは 高山の 岩根しま  
きて 死なましものを

かくばかり こひつつあらずは たかやまの いは  
ねしまきて しなましものを

在管裳 君乎者将待 打靡 吾黒髪尔 霜乃置萬代  
日 八七

ありつつも 君をば待たむ うち靡く 我が黒髪に  
霜の置くまでに

ありつつも きみをばまたむ うちなびく わがく  
ろかみに しものおくまでに

秋田之 穂上尔霧相 朝霞 何時邊乃方二 我戀將

息 八八

秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 いつへの方に

我が恋やまむ

あきのたの ほのうへにきらふ あさがすみ いつ  
へのかたに あがこひやまむ

居明而 君乎者将待 奴婆珠乃 吾黒髪尔 霜者零

騰文 八九

居明かして 君をば待たむ ぬばたまの 我が黒髪  
に 霜は降るとも

ゐあかして きみをばまたむ ぬばたまの わがく  
ろかみに しもはふるとも

右の八五番から八九番の歌は、磐姫皇后（いはのひ  
めのおほきさき）の作られた歌として載せられている  
ものです。

磐姫皇后は、仁徳天皇の皇后です。仁徳天皇が難波  
にお出ましになって、なかなかお戻りにならないこと  
から、その寂しさを歌われたものとされています。

八五番の歌は、（天皇が）難波から大和になかなか  
お戻りにならない、お迎えに行こうかどうかどうしよ  
うか、やはりお待ちしよう、と迷っておられます。この  
歌は、山上憶良の編んだと言われる『類聚歌林』に収  
録されていたものを採録したと、左注に記されていま  
す。

八六番の歌は、（天皇の）お帰りを待つて待つて、  
待つている内にますます恋しさが増して来る。この苦  
しさをどうしたらよいだろうか、と歌います。

八七番の歌は、あまりにも長い年月お帰りを待つて  
いるので、私の黒髪にもいつしか霜が降りてしまいま  
しょう、と歌います。

八八番の歌は、秋の田も実って、稲穂の上に霧が立  
ち、朝霞がたなびく季節となりました。私の恋はいつ  
までつづくのでしょうか、と歌います。

この四首の歌が磐姫の作られた歌として紹介されて  
いますが、もう一首、八九番に「或本の歌に曰（い）  
はく」として、八七番の類歌が載せられています。

その意味は、あなたのお帰りを、髪が白くなるまで  
お待ちします、というものです。左注に「右の一首  
は、古歌集（こかしふ）の中（うち）に出づ。」と記  
されています。すなわち、既にこのような歌があった  
ということが述べられているのです。  
またもう一首、九〇番の歌として、

君之行 氣長久成奴 山多豆乃 迎乎將往 待尔者  
不待 九〇

君が行き 日長くなりぬ 山たづの 迎へを行かむ  
待つには待たじ

きみがゆき けながくなりぬ やまたづの むかへ  
をゆかむ まつにはまたじ

この歌は八五番とほぼ同じで、最後が迎えに行かなければ、と積極的な歌となっています。「記・紀」に乗っている歌で、八五番の歌はこの歌を元としたものだ、と「万葉集」の編者から指摘されていることになります。

磐姫は「記・紀」では、大変嫉妬深い女性として取り上げられている皇后です。初期の「万葉集」の時代である持統朝でも、そのように捉えられていたと言われます。「記・紀」では、夫である仁徳天皇が、八田皇女（やたのひめみこ）という女性を宮中に入れようとしていることを知って、熊野に隠遁してしまったと

記されています。磐姫は、そのまま熊野で没したと言われます。そのことが、この「万葉集」にも、九〇番の歌の前後に、「題詞」として、また「左注」として紹介されていますので、ここに再録してみましよう。

（以下、九〇番の題詞）

古事記に曰はく

軽太子（かるのひつぎのみこ）、軽太郎女（かるのおほいらつめ）に奸（たは）く。この故（ゆゑ）にその太子を伊予（いよ）の湯に流す。この時に、衣通王（そとほりのおほきみ）、恋慕（しのひ）に堪（あ）へずして追（お）ひ往（ゆ）く時に、歌ひて曰はく、

（以下、左注）

右の一首の歌は、古事記と類聚歌林と説（い）ふところ同じくあらず、歌の主（ぬし）もまた異（こと）なり。よりて、日本紀（にほんぎ）に檢（ただ）すに、曰はく、「難波の高津（なにはのたかつ）の宮に天の下知らしめす大鷦鷯天皇（おほさざきのみすめらみ

こと)の二十二年の春正月に、天皇、皇后(おほきさき)に語りて、八田皇女(やたのひめみこ)を納(め)しい)れて妃(きさき)とせむとしたまふ。時に、皇后聽(うけゆる)さず。ここに、天皇、歌(みうた)よみして皇后に乞ひたまふ云々(しかしか)。三十年の秋九月、乙卯(きのとう)の朔(つきたち)の乙丑(きのとうし)に、皇后、紀伊(き)の国に遊行(いでま)して熊野(くまの)の岬(みさき)に到りてその処の御綱葉(みつなかしは)を取りて還(まゐるかへ)る。ここに、天皇、皇后の在(いま)さぬを伺(うかか)ひて、八田皇女を娶(めと)りて宮の中(おほみやのうち)に納(めしい)れたまふ。時に、皇后、難波(なには)の濟(わたり)に到りて、天皇の、八田皇女を合(め)しつと聞きて大きに恨みたまふ云々」といふ。また曰はく、「遠(とほ)つ飛鳥(あすか)の宮に天の下知らしめす雄朝孀稚子宿禰天皇(をあさづまのわくこのすくねのすめらみこと)の二十三年の春三月、甲午(きのえうま)の朔の庚子(かのえね)に、木梨輕皇子(きなしのかるのみこ)

を太子(ひつぎのみこ)となす。容姿(かたち)佳麗(きらきら)しく、見る者(ひと)おのづからに感(め)づ。同母妹(いろも)輕太皇女(かるのおほいらつめのひめみこ)もまた艷妙(かほよ)し云々。つひに竊(ひそ)かに通(あ)ふ。すなはち悒懷(いきどほり)少しく息(や)む。二十四年の夏六月に、御羹(みあつもの)の汁凝(こ)りて氷(ひ)となる。天皇、異(あや)しびてその所由(よし)を卜(うら)へしめたまふ。卜者(うらへ)の曰(まを)さく、『内の乱(みだ)れ有り。けだしくは、親々(はらがらどち)相奸(たは)けたるか云々』とまをす。よりに、太皇皇女を伊予に移したまふ」といふ。今案(かむが)ふるに、二代二時に、この歌を見ず。やや長い引用になりましたし、拙論とは少々離れたものになりましたが、この題詞と左注では、九〇番の歌の出所について述べられております。題詞では、輕太子(允恭天皇の皇太子)が、同母妹の輕太郎女に恋情を持ち、輕太子は伊予の湯(現在の道後温泉)に流



されたと伝えられる。その時に、軽太郎女が歌った歌としてここに掲げられたとあります。軽太郎女は、軽太子の後を追って、伊予に渡ったと伝えられます。

しかし左注では、この歌には『古事記』と『類聚歌林』に説が分かれる。一つは、磐姫の歌った歌であるとして、仁徳天皇と八田皇女の件が語られ、そのために磐姫は熊野に隠れてしまったと記しています。もう一つが、同母兄妹のあつてはならない恋愛に由来して、妹姫の歌った歌とされ、妹姫は、兄太子の後を追ったと伝えます。以上の題詞と左注の原文は、漢文で記されていて、現在私どもが読んでいるものは、後世の人が読み下して、あたかも日本語で書かれたような文章の形態になっております。文章そのものが古いからというだけでなく、原文が漢文であることから、滑らかさを欠いた文章と感じられるのではないでしょうか。そして「万葉集」には、このような逸話が随所に織り込まれていて、編者の目論見を垣間見せてくれているように感じられます。

ここまでの「万葉集」の表記は、漢字は訓読されていて、わが国初期の文字表記の書でありながら、外国文字、しかも表意文字である漢字を、わが国の言語を表す文字として使用しているように見えます。また、現在ではカナ文字で表す助詞・助動詞・送り仮名も、カナ文字の開発にはまだ間が必要で、漢字の字音と訓読を借りて表しています。それらをそれぞれ「音仮名」と「訓仮名」と呼んでいます。これがカナ文字の起りであることは間違いありません。この原始的なカナ文字を、「万葉仮名」と呼んでいます。

しかしながらそのように、「万葉集」は漢字を訓読して日本語を表した最初の書物であるとする見方は少々早計でなからうか、という考えもあります。「万葉集」を既に日本語で読んでいて、原文をやり過ごすのに馴染んでいる私どもの、陥り易い誤りなのかもしれない、という議論です。現在私どもが「万葉集」を読む場合、原文では読みません。読まないのではなく、読めないのです。従って既に漢字仮名交じりになって

いる、日本語文の「万葉集」を、「万葉集」として読むことになります。その中に記されている漢字は、例外なく訓読されていますので、漢字の訓読は漢字の日本語の読みだと捉えるのも無理のないところかもしれません。しかしここにも一つのクエスチョンを添えて置くのもよいことだ、私にはそう思われます。この後にご紹介する人麻呂の二種の歌は、当時の表記の変化を、跡づけているように見えるからです。

八隅知之 吾大王之 所聞食 天下尔 國者思毛

澤二雖有 山川之 清河内跡 御心乎 吉野乃國之

花散相 秋津乃野邊尔 宮柱 太敷座波 百磯城乃

大宮人者 船並豆 旦川渡 舟競 夕河渡 此川乃

絶事奈久 此山乃 弥高思良珠 水激 瀧之宮子波

見礼跡不飽可聞 三六

やすみしし 我が大君の きこしめす 天の下に

国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と 御

心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱

太敷きませば ももしきの 大宮人は 舟並めて 朝

川渡る 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆることな  
く この山の いや高知らす 水激く 瀧の宮処は  
見れど飽かぬかも

やすみしし わがおほきみの きこしめす あめの  
したに くにはしも さはにあれども やまかはの  
きよきかふちと みこころを よしののくにの はな  
ぢらふ あきづののへに みやはしら ふとしきませ  
ば ももしきの おほみやひとは ふねなめて あさ  
かはわたる ふなぎほひ ゆふかはわたる このかは  
の たゆることなく このやまの いやたかしらす  
みなそそく たきのみやこは みれどあかぬかも

### 反歌

雖見飽奴 吉野乃河之 常滑乃 絶事無久 復還見  
牟 三七

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることな  
く またかへり見む  
みれどあかぬ よしのかはの とこなめの たゆ  
ることなく またかへりみむ

この三六番と三七番の歌は、天武天皇の崩御の後、持統天皇が吉野に行幸した折りに、柿本人麻呂が作ったものと言われる歌です。宮廷歌人としての入麻呂の傑作の一つと言われる歌です。持統天皇は、天武天皇の崩御の後、何度も吉野に行幸しておられます。天武・持統両天皇にとって、吉野は最も神聖な地であったと言われます。その神聖な地で、国を統治するための力を、神々から受け取ろうという願いから、幾度も行幸なさったのであらうと言われています。

入麻呂の歌は、その吉野の山河の美しさ・雄大さを讃え、そしてそれに勝るとも劣らない天皇の威厳を讃えます。吉野の神々と天皇が、同列の權威をお持ちになつておられる、そのことは神々が認めておられるということです。入麻呂は宮廷歌をこのように書き上げて、宮廷歌のあり方を示したとも言えます。

それとは別に入麻呂は、もう一つの歌の系列を表しました。

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉 一二四七  
大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らくし  
よしも

（大穴道（おほなむち） 少御神（すくなみかみの） 作（つくらしし） 妹勢能山（いもせのやまを） 見吉（みらくしよしも））

吾妹子 見偲 奥藻 花開在 我告与 一二四八  
我妹子と 見つつ偲はむ 沖つ藻の 花咲きたらば  
我れに告げこそ

（吾妹子（わぎもこと） 見偲（みつつしのはむ）  
奥藻（おきつもの） 花開在（はなさきたらば）  
我告与（われにつげこそ））

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉 一二四九  
君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし袖  
濡れにけるかも

（君為（きみがため） 浮沼池（うきぬのいけの）  
菱採（ひしつむと） 我染袖（わがそめしそで）

沾在哉（ぬれにけるかも）

妹為 菅實採 行吾 山路惑 此日暮 一二五〇

妹がため 菅の実摘みに 行きし我れ 山道に惑ひ

この日暮しつ

（妹為（いもがため） 菅實採（すがのみつみに）

行吾（ゆきしわれ） 山路惑（やまぢにまとひ）

此日暮（このひくらしつ）

この四首の歌の表記の特徴の一つは、文字の数が極めて少ないところにあります。現在であればカナ文字で表記する助詞・助動詞・送り仮名が省略されているからです。このような表記を、「略体表記」と呼びます。この「略体表記」は、一見漢文に酷似していません。それもそのはずで、この「略体表記」の表記法は、漢文の文字の並びを、中国語の並びではなく、日本語の並びにしたものだからです。その意味で「略体表記」は、日本語の表記の第一歩だったと考えられているのです。

しかし「万葉集」の歌について見れば、極めて綿密な定形に従っています。冒頭の雄略天皇の御製歌と舒明天皇の御製歌の歌の後の歌は、長歌は五・七の音律に忠実に従っておりまし、短歌は、恐らく長歌の最後の五・七・五・七・七を独立させたもので、長歌よりも自由度を獲得した表現を表すのに成功しております。

しかしこの定形がどのようにして取られるようになったのかは、極めて難解な課題として残るようです。というのも、この定形は、遙か一千年以上後の現代でも、強い力で日本語を支配しているからです。試しにその辺の広告などから言葉を抜き取って見れば、それは五音と七音からなっていることがほとんどだということが分かります。

その定形に乗せて日本語の表記を作ったのが、恐らく柿本人麻呂だったのでしよう。

人麻呂はまず漢文の文字の並びを変えるところから始めたと言えましよう。そして中国語にはない、あるいは日本語のような形では存在しない助詞・助動詞・

送り仮名を、まずは省略して後に足し加えながら読むという方法を取ったのではないのでしょうか。

しかし宮中の儀式に捧げる歌としては、それでは足りません。どうしても助詞・助動詞・送り仮名を、文字として加える必要が出てきました。そこで人麻呂は、訓読だけしてきた漢字を、音仮名や訓仮名として利用するという、画期的な方法を編み出した、ということだったのでしよう。これは多くの人の、集団の中から最大公約数的に定められたものではなく、人麻呂の強力な力業が為した成果だったのでないか、そう私には思われます。

「万葉集」では、このような書記法が持続朝ばかりでなく、七三〇年辺りの旅人や憶良にも取られています。しかし書記法にも変化が見られて、以下の大伴家持の歌のようなものに変わって行きました。

橘乃 尔保敝流香可聞 保登等藝須 奈久欲乃雨尔  
宇都路比奴良牟 三九一六  
橘の にほへる香かも ほととぎす 鳴く夜の雨に

うつろひぬらむ

たちばなのにほへるかかも ほととぎす なくよの

あめに うつろひぬらむ

可加良牟等 可称弓思理世婆 古之能宇美乃 安里

蘇乃奈美母 見世麻之物能乎 三九五九

かからむと かねて知りせば 越の海の 荒磯の波

も 見せましものを

かからむと かねてしりせば こしのうみの あり

そのなみも みせましものを

三九一六番の歌は、聖武天皇の子・安積皇子（あさかのみこ）の急死のためにできた休暇を利用して作ったという歌です。橘の香りと、時鳥の声を、静かに愛でています。

三九五九番の歌は、越前守として今の福井県に赴任しているときに、弟の訃を知って作った歌です。挽歌です。越の海を見せてやりたかった、その思いがよく伝わる歌です。

ここでは漢字を訓読したり、訓仮名を使ったりとい

うことはありません。極一部、山や河や橘などの訓読は見られますが、基本的に全て音仮名で記されており、ます。これらの音仮名を、「万葉仮名」と呼び習わしてきました。この「万葉仮名」が、次の平安時代のいわゆる変体仮名の開花に繋がったのでした。

これでやっと日本語の表記が、漢文から独立することになった、となれば誠によかったのですが、残念ながらそのようなには参りませんでした。ご承知の通り現在では、漢字仮名交じり文が通用の表記法となつて、漢字の日本語の表記に占めるところが大変大きいことを痛感させられることとなっております。

一つには、家持の段階で、音仮名だけの表記が現れはしましたが、これは歌の世界だけのことで、わが国の正式の文書は、漢文であることが、つい先頃まで続いていたのでした。

そして「意味」です。「意味」とは何ぞ？平安時代から今日まで、カナ文字で表記された文章は数限りなく存在しました。平安の女流文学は、本来カナ文字だけの文学だったので、現在残されているものは、漢字を交えた文章となっております。言わば仮名文学

の最初期の書である「万葉集」が、何時しか漢字仮名交じり文になつて、もともとがこのように書かれていたものと、誤った理解を導いております。

漢字という文字は、強力な「意味」という力を蔵して、言葉を支配しております。そして日本語の音には、その「意味」を支えるだけの力がなかった、と考えれば、漢字とどう付き合つて行くべきか、自ずと見えてくるのではないか、そんな風に私は考えております。漢字を知らないまま成人に達した己を振り返りますと、現在も漢字を知らないまま生活している視覚障害者に、どのように語りかけることができるか、残念ながら手探りであることには、変わりはありません。これまでの試みは、誠に残念ではありますが、なぜか強い反発をもたらすだけでした。また視覚障害者の周辺の晴眼者の皆様からのお力添えも、残念ながら得られずにあります。大変残念です。

日本人であるならば、日本語の標準的な表記法を、是非自らのものにしていただけるよう、願つて止みません。

## 点字から識字までの距離(一一六)

### 通所支援事業所へのサービス(六)

山内 薫

#### ほわわ墨田でのお話し会

ほわわ墨田は児童発達支援サービスを行っている通所支援事業所で、医療ケアが必要な就学前の子どもたちを対象としている。ほわわ墨田を運営しているのは愛知県に本部のある「社会福祉法人むそう」で愛知県半田市の本部の他、全国に二〇カ所に事業所があり、活動を展開している。愛知県以外では東京に四カ所、宮城に二つの事業所があり、その特徴はライフステージに合わせた支援だという。法人のパンフレットには「誕生から看取りまで、生涯寄り添える存在でありたい」という見出しの元に「むそうが目指しているのは、たとえ家族がいなくなっても障害のある本人が、『自分らしい暮らしを、暮らしたい地域で継続できること』です。『育む』『働く』『住む』『経験する』

この四つの基本的な支援を軸に、子どもの成長を支え、あたたかい「人の垣根」で包み込み、成人から老年期までの暮らしにずっと寄り添って行きたいと考えています。」と書かれている。ほわわ墨田のような児童発達支援事業の他に、余暇・社会参加支援を行う地域生活支援サービス、働くことを支援する日中活動系サービス、グループホームや一人暮らし支援と四つのサービスを行っている。児童発達支援を行っている事業所は愛知県の二カ所の他に、東京の墨田、世田谷、品川、大田にある。むそうの児童発達支援サービスはいずれも「医療ケアが必要な子どもたちの成長を支え、たくさんの人で包み込む」とあり「呼吸器が必要なお子ども、気管切開や胃ろうなどの状態のお子ども、さまざまな要因で医療対応が必要な子どもたちが、自宅で家族とだけ生活するのではなく、むそうのスタッフや友達と楽しくコミュニケーションを取りながら生活する場所です。小さな命をささえる家族とその子どもたちが、少しでも将来に生活に見通しをたて、安心して暮らせる社会をつくりたいと考えています。」と記

されている。

実は昨年二〇二一年六月に「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」（通称「医療的ケア児支援法」）が成立し、九月一八日に施行された。この法律については後の回で詳しく取り上げる予定だが、厚生労働省のホームページにはこの法律について「医療的ケア児とは、医学の進歩を背景として、NICU等に長期入院した後、引き続き人工呼吸器や胃ろう等を使用し、たんの吸引や経管栄養などの医療的ケアが日常的に必要な児童のこと。全国の医療的ケア児（在宅）は約二・〇万人（推計）」と記されており、具体的に「生きていくために日常的な医療的ケアと医療機器が必要（例）気管切開部の管理、人工呼吸器の管理、吸引、在宅酸素療法、胃瘻・腸瘻・胃管からの経管栄養、中心静脈栄養等」と例示されている。

<https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/>

000794739.pdf

さて、このほわわ墨田から、お話し会の依頼があり、二〇一九年一月三〇日午後一時過ぎに訪問するこ

とになった。急な依頼だったこともあり、ひきふね図書館の職員二人、児童館のお話し会や図書館のお話し会でパネルシアターやエプロンシアターなど多彩な出し物をして下さっている「つくしんぼう」というグループのSさん、そして私の四人で出かけていくことになった。事業所には五人の子どもたちがおり一人ひとりに職員がついて、職員の膝の上で皆おはなしを聞いてくれた。職員は看護師、作業療法士、理学療法士、児童指導員、保育師などの資格を持つ人とその補助の人などで、この日は七人の方がおられた。プログラムも急遽決めたが、やはり歌入りの出し物を中心として構成した。

最初は職員のKさんの手遊び歌「しあわせなら手をたたこう」。歌を歌いながらみんなに手をたたいてもらった。（写真一）



写真1 始まりは「しあわせなら手をたたこう」



次にSさんがパネルシアターの「くいしんぼうなゴリラ」を行った。パネルシアターの中央にゴリラが貼り付けてあり、「くいしんぼうなゴリラがバナナをみつけた　かわむいて　かわむいて　パクンとたべた　ドンドコドンドン　ドンドコドンドン　おーうまい」

(作詞　阿部直美、作曲　おざわたつゆき　ただし歌詞についてはさまざまなバージョンが作られて、歌われている)という歌詞に合わせて、バナナの絵札を出して、皮をむいていく動作を繰り返し、絵を裏返すとむいたバナナになっていて、それをゴリラの口の中に入れる。次はレモンで「おーすっぱい」、ゴーヤで「おーにがい」、赤唐辛子で「おーからい」と続き、タマネギで「皮むいて、皮むいて、食べるころがなくなつた、ドンドコドンドン　ドンドコドンドン　うえーん、うえーん」そして最後に「チョコレート」で再び「おーうまい」に戻っておしまい。(写真二)

引き続きSさんのパネルシアター「ぼんたくんの大変身」(『保育いきいきパネルシアター』　松家まきこ　大東出版社　所収)。頭の部分(顔と耳)と身体

の部分(お腹と足)が同じ形の動物が描かれ、中央部分で折れるようになっており、それぞれが張り合わさっていて、めくると違う動物になる仕掛けで、タヌキ、パンダ、ブタ、コアラと変身していき、最後にまたタヌキに戻る。「ぼんぼんぼん

たくんの大変身、ズンチャズンチャズンチャズンチャ、ズンチャズンチャズンチャズンチャ、ぼんぼんぼんたくん、ぼんぼんぼんたくん、葉っぱをのせて、ルルルルー、ポン、パンダさんになっちゃった」という歌に合わせて、頭の上に葉っぱをのせ、足の部分をめくるとパンダに変身する。(写真三)

二つのパネルシアター共に歌によって展開するので、子どもたちも楽しそうに見えて、ぼんたくんの大変身では歌に合わせて手拍子を打ってくれた。(写



写真2　パネル「くいしんぼうなゴリラ」

真四)

次に私が絵本『ねばらねばなっとう』（林 木林著、たかお ゆうこ絵、わくわくユーモアえほん、ひかりのくに）を紙芝居化したものを行った。この絵本は替え歌の絵本で、元歌は「静かな湖畔」。「静かな湖畔の森のかげから もう起きちゃいかがと かっこうがなく カッコー カッコー カッコカッコカッコー」という元歌のカッコーの部分をナットーにかえて歌うもの。「しずかなご飯の粒のかげから、糸引き綱



写真3 「ぼんたくんの大変身」葉っぱをのせて



写真4 コアラくんに変身、さて次は……



写真5 手をたたきながら、なっとう、なっとう



写真6 組み体操で怪獣が一等賞に、いっとう、

引きはじめよか ナットー、ナットー、ナットナットナットー」と、ナットーたちがテーブルの上で運動会を繰り広げるといふもの。（写真五）途中、組み体操の部分だけはナットーがイットー（一等賞）になる。（写真六）図書館や児童館などでやるときには「ナットー、ナットー、ナットナットナットー」の部分に参加者にも一緒に唱和してもらおうのだが、このテンポで声を出すのは難しい子どもたちなので、やはり、手をたたいてもらった。

次はペーパーサートで歌う「どんないろがすき」（坂田おさむ作曲）。赤、青、黄色、緑のクレヨンとそれぞれの色のリング、長靴、レモン、葉っぱのペーパーサートを出しながら歌を歌った。

そして、行事用の大型絵本を使って『だるまさんの歯』（かがくいひろし・さく ブロンズ新社）を読んだ。

続いて紙芝居の『おにぎりおにぎり』（長野 ヒデ子脚本・絵 童心社）を歌と振り付け入りで行った。

（写真七）「おにぎりギョッ、ウメボシ入れて、ギョッ、ギョッ、おにぎりギョッ、ギョッ、おにぎりギョッ」という歌詞に曲を付け、「おにぎり（グー）の両手で交互に空間をたたく）ギョッギョッ、（両手でおにぎりをにぎ



写真7 大型絵本『だるまさんの歯』

る動作）おにぎりギョッ（前の動作のくり返し）、ウメボシ入れて（左手の掌に右手のチョキで梅干しを入れる動作）ギョッギョッ（両手でおにぎりをにぎる動作）おにぎりギョッギョッ、おにぎりギョッギョッ（それぞれの動作のくり返し）」という振りを付けて一緒に歌と動作をやってもらおう。このようにして梅干しの次はかつお節、塩ジャケなどを入れて、できたおにぎりを持って裏山でみんなと一緒に食べるというストーリー。子どもたちは介護の方に手を添えてもらいながらおにぎりをにぎる動作を一生懸命してくれた。

次は、みんなもよく知っている『はらぺこあおむし』（エリック・カール作 もりひさし訳 偕成社）の行事用大型絵本を読んだ。（写真八）絵本を読み終わった後、折



写真8 大型絵本『はらぺこあおむし』

り紙で作った大小のはらぺこあおむしをお土産においていった。

最後は絵本『どっとこどうぶつえん』（中村至男著 福音館書店）でページごとに出てくる動物を当ててもらった。動物たちはドットで表されているにもかかわらず、ほとんどの動物を当ててくれた。

医療ケアの必要な重度の障害児へのお話し会はキッズサポートりまで今までにも何度も行ってきたが、学齢前の子どもたちは初めてだったので、特に歌などを中心にプログラムを組み立てたが、少し欲張りすぎて長かったようで、お終いの方は少し疲れた様子が見えた。

歌や音楽を中心に実施したことは良かったと思うが、それぞれの出し物をもう少しゆっくり行えば良かったのではないかと反省している。図書館や児童館で実施するときとほとんど同じテンポで歌ったり読んだりしたが、それも子どもたちが疲れる要因になったのではないかと思う。

## わたくしごと(いろいろ)

木村 多恵子



### 1. ローザ パークス

1955年12月1日、アラバマ州モンゴメリーのこと、ローザ パークスは期せずして夫の反対を押し切って〈バスボイコット運動〉に参加した。同じ料金を払っても、白人は前の席、黒人は後ろの席と区別されており、たとえ前の席が空いていても、黒人は後ろまで行かなければならなかった。この人種差別にローザは抵抗した。普段は差別バスに乗るより歩く方を選んでいたが、その日、ローザは疲れ果てていて、バスに乗り席に着いた。と、「座席を譲れ」と言われ、ローザが「嫌です」と断ると、ローザは即座に逮捕されてしまった。

賛否両論が巻き起こり、ついに1956年クリスマスにバームス判事によって〈バス座席差別〉は、違法と判断された。が、現実にはその習慣はなかなか変わ

らなかった。地域にも差はあるだろうが、1990年頃でもその習慣は変わらなかったようである。

私の知人がアメリカから帰ってきて、「差別はいくらでもある」と、話してくれたのは2019年のことであるから、私には想像もつかない。

なお、ローザ パークスは2005年92歳で老衰で亡くなったと聞く。

## 2. ヘアメリカ同時多発テロ

アメリカ ニューヨークの（ワールドトレードセンター）で起きた同時多発テロ事件は、2001年9月11日のことだった。

アメリカ議会は襲撃実行犯等に対して、ほぼ全員が〈有罪〉としたが、その議会の一人の女性下院バーバラ リーは反対（無罪）と言った。多くの人はそれを「なぜ？」と問うた。

ある記者がバーバラ リーに聞くと「子供の頃から、母になんでも全員一致はないと教えられていたから」と答えたと言う。

私も「全員一致の意見はありえない。」ということ

は聞かされていたので、そうか、そういうことか、と理解した。全員一致の意見はそっくりそのまま決定されたものの打ち消しになるのだと言う。

それにしてもバーバラ リーの勇氣はすごい。

## 3. わたしはコップ

わたしはコップ、小さなコップ、どこにでもある、ありふれたコップ。けれどもこの世にあるたった一つのコップ。なぜっていつの間にか薄汚れ、透明度を失い、傷だらけ。ヒビ割れもあり、おもてはおろか、中も底も裏底にもたくさん傷がある。好き勝手なヒビ、それでもコップのわたしはわたしを愛おしみながら、疎みながら、大切にしてきた。世界にたった一つのヒビだらけのコップというわたし。やがてコップは微塵に壊れる。ヒビ割れから飛んだ破片は人を、誰かを傷つけただろう。どうか最後の破片がどなたをも傷つけませんように！

「ありがとう！」と一言囁いて、人に気づかれない石英になって静かに沈んで行きたい小さな器。

江戸時代の女性漢詩人

春雨しゅんう即興そつきよう 原采蘋はらさいひん

閑窓ニシテ 軽暖ニシテ 雨空 濛タリ

煙ハ抹ス 前村 万頃ノ 中

醉裏ルモ 得レ 詩ヲ 嬾ク 題スルニ 字ヲ

欲シテ 醒マサント 徐ロニ 立ツ 柳梢ノ 風ニ

(采蘋詩集)

雨空濛 雨がけむったように降るさま。  
煙抹 煙は、もや・かすみの類。

もやが村を塗りこめたさまをいう。

閑窓かんそう 軽暖けいだんにして 雨空濛あめくうもうたり

煙けむりは抹まつす 前村ぜんそん 万頃ばんけいの中うち

醉裏すいり 詩しを得るも 字じを題だいするに嬾ものうく

醒さまさんと欲ほつして 徐おもむろに立つ

柳りゅうしようの風かせに

〔訳文〕

のんびりと窓べにすわっているとなま暖かく、そとは春雨にけむっている。向かいの村は、はてしなく広がるもやの中に塗りこめられてしまった。

酔っているうちに詩を思いついたが、字を書くのも面倒くさく、酔いを醒ませようと、そろそろと立ちあがり、柳の梢に吹く風にあたってみた。

大修館『漢文名作選「第2集」

5 日本漢詩文』による。

春 雨 即 興      原 采 蘋  
 閑 窓 軽 暖      ニシテ 雨 空 濛 々  
 煙 ハ 抹      ス 前 村 万 頃 ノ 中  
 酔 裏 得      ルモ 詩 ヲ 嬾 ク 題 スル  
 ニ 字 ヲ  
 欲 シテ 醒 マサント 徐 ロニ 立 ツ 柳  
 梢 ノ 風 ニ

原 采蘋 (はら さいひん)  
 (1798~1859年)  
 江戸時代後期の漢詩人。

筑前秋月藩 (現・福岡県朝倉市) の  
 儒学者、原古処 (こしよ) の娘。名は  
 猷 (みち)。男子と同等の教育を父から  
 受けた。

28歳から20年あまり江戸に滞在  
 して、頼山陽 (らいさんよう) などから  
 詩の指導を受けた。私塾をひらき、  
 漢詩や漢学を教えて自活する。

著名な文人たちと詩酒をかわしながら、  
 男装帯刀の姿で各地を周遊した。  
 豪放磊落な性格で、酒好きでもしられる。  
 「春雨即興」は采蘋31歳の作。



『楊花飛ぶ  
 原采蘋評伝』  
 小谷喜久江  
 (九夏社)

『楊花飛ぶ 原采蘋評伝』の題は采蘋の詩の一節、  
 “<sup>あと</sup>跡 (私の足跡) は楊花の風<sup>ようか</sup>に倚りて飛ぶ<sup>よ</sup>に似たり、  
 による。(楊花は、やなぎの綿毛)



本誌機関誌『うか』第一二三号は、今年の一月に発行する予定でしたが、新型コロナウイルス・ウィルスの感染者の急増とぶつかり、止むなく発行を断念しました。流行はとてども下火とは言えない状況とは思われますが、それでもそろそろ出したいという気持ちが起こりまして、会員のお力をお借りすることになりました。

### 一 賛助会費への御礼

二〇二一年度に賛助会費をお納めいただきました皆様、誠にありがとうございます。ご芳名を掲げて、感謝に代えさせていただきます。

村田忠禧様	坂口喜代様	雨宮絢子様
岡 稲子様	河村美智子様	馬場威力様
関口常正様	政井宗夫様	田崎吾郎様
木原純子様		

大変ありがとうございます。有効に使わせていただきます。

### 二 『萬葉集釋注』第十巻が完成致しました。

この十年をかけて、伊藤博著『萬葉集釋注』（集英社文庫）の漢点字訳を進めて参りましたが、このほどその第十巻が完成致しました。十四分冊となりました。製本した漢点字書は、これまで同様、横浜市中央図書館に所蔵していただきました。

第十巻は、『萬葉集』の巻十九と巻二十を治めた巻で、『萬葉集』の結びとなっています。

以下、伊東先生の「釈注」から引用させていただいて、内容のご紹介とさせていただきます。

巻第十九は、『万葉集』第二部末四巻の第三巻。天平勝宝二年（七五〇）三月一日から天平勝宝五年二月二十五日まで三年間、大伴家持三十三歳から三十六歳



までの歌を収める。この時期は家持の越中国守在任時代の後期（四一三九〜二五六〇一年五か月）と再度の京官時代の初期（四二五七〜九二〇一年七か月）にあたる。四一三九から四二九二まで一五四首。前者は一八首、後者は三六首で、大部分は越中国守時代の詠の集合といつてよい。内わけは、長歌二三首、短歌一三一首。家持の作は長歌一七首、短歌八六首。巻末に、この巻に限って家持の作品には名字を示さないと明記している。

巻末におけるこの明記は、「大伴宿禰家持歌集」四巻を根幹にして成り立ったと見られる『万葉集』末四巻にあって、巻十九が特別視されていることを物語る。この特別視は歌の表記の上にも現われている。すなわち、『万葉集』の末四巻は、巻十七、巻十八、巻二十の三巻の歌々が音仮名（表音文字）主体によって記されているのに対し、巻十九の歌々だけが正訓字（表意文字）主体によって記されているのである。巻十九巻末尾の格別な注記と巻十九の歌々の表記の特色

とは深い関係があり、これは、末四巻の成立の問題ともかかわる。

巻十九は、家持にとつてとくに自信の持てる、いわゆる文芸性の高い歌々を集めた歌巻として、他の三巻に先立って、天平勝宝五年（七五三）の前半の頃には成立を見たものと覚しい。当面の主たる読者としては、家持自身や妻坂上大嬢、母（姑）大伴坂上郎女はもちろんのことながら、多年の歌友大伴池主が重要な人として考えられる。家持は、これに引き続き、巻十九を基準に二つの歌巻を編んだ。それが原本巻十七（三九二二〜四〇三一）と原本巻十八（現存巻十八に伝来途上の脱落歌を復原した形）であった。両巻原本完成の時期は、天平勝宝七歳二月、難波で東国諸国の防人歌を蒐集しはじめるより以前、おそらく天平勝宝六年中のことであつたと推測される。家持が生涯畏敬しつづけてやまなかつた聖武天皇や橘諸兄が健在であつた時期で、家持としては、さような人びとの高覧に与りたいというのが歌集編纂の本願であつたふしがい

ちじるしい。後述するように、すくなくとも卷十九相当「大伴宿禰家持歌集」一卷は、表立っては、家持多年の庇護者、左大臣正一位橘朝臣諸兄への献上本として成り立った形跡を看取することができる。

(以下略)

十年という年月をかけて本書の漢点字訳を進めて参りました。本会会員の皆様の、息の長い活動の成果であることは間違いありません。

わが国最古の歌集である『萬葉集』を、何とか漢点字で読みたい、また、原文はどんな風に書かれているのだろうか、等々、手に触れることのできなかつたころは、空想の世界の書物でしたが、実際に読めるようになってみると、その奥深さは想像を遙かに超えるものであることを、骨身に染みだ思っております。

会員の皆様への感謝を込めて、ここに深く頭を垂れます。大変ありがとうございました。

### 三 国立国会図書館

かねてより、本年四月から、漢点字のデータを、サピエ図書館の蔵書とするというご案内を、国立国会図書館から頂戴しておりました。

先月下旬に、予定通り四月から、サピエ図書館で、蔵書となるデータを受け入れることになった旨、ご案内が届きました。

早速当方で製作しております中から、極短いものを、お送りしました。

しかしながらまだ、本誌の発行に間に合う内には、どんなものか、お答えは届いておりません。

お待ちすることに致します。

### 四 音訳版『常用字解』の完成が間近です。

毎度ご報告しておりますが、いよいよ音訳版の『常用字解』の完成が間近となりました。

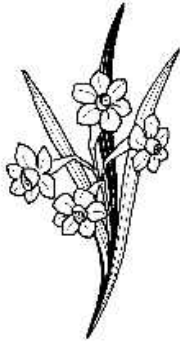
現在音訳版を製作するのに当たって、これまでにならぬ試みを幾つか行なって参りましたが、それを文字情報

として収録する作業に取りかかっております。

音訳書というのは、晴眼者の皆様が聴読するという  
ことは、まずありません。しかし音訳に携わったもの  
としては、他の音訳者の皆様にも、どのような取り組  
みをしたかということを知っていただきたいという、  
誠に素朴な欲求が頭を擡げて参ります。  
それを文字資料として収録致しますので、ご笑覧賜  
れば幸甚に存じます。

また、文字説明の資料として、「岡  
田メモ」と呼ぶファイルを作っております。

羽化の会のホームページに掲載致し  
ますので、ご利用賜れば幸甚に存じま  
す。



E-MAIL: [okada\\_tr\\_eib@ybb.ne.jp](mailto:okada_tr_eib@ybb.ne.jp)  
横浜漢点字羽化の会、URL:  
<http://www.ukanokai-web.jp/>

## コラム

### 「字式」について

本会では、漢字の字形を説明するのに、「字式」を使用しております。「字式」は、故・川上泰一先生が考案されたもので、横の関係を「+」で、縦の関係を「/」で表したものです。しかし「+」と「/」だけでは表し切れませんので、本会では、記号を少し増やしました。漢点字版の『常用字解』では、これを使って字形を表しました。現在完成を間近としております音訳版の製作に当たっては、音訳者の皆様がこれを読み込んで、字形を説明して下さいました。

その幾つかを例示してみます。

木偏+目=相      相/心=想      口>玉=国      米<气=氣  
立・厂>彡=彦      立・厂>生=産      十/口・小=京  
日/京=景      景+彡=影      冫/“元@+寸”=冠      九@+日=旭  
刀/口=召      走@+召=超

(岡田 剛嗣)

## 編集後記

▼当会では長年インデックス社のエヴェレスト点字プリンターを愛用しています。既に30年近く使用しているわけですが、あまり使用頻度が高くないとはいえ、機械的な損耗が蓄積しています。最近、紙送りのローラーが摩擦しているのを見て、印刷された用紙の片方が枠にこすれた跡を残すようになりました。時には用紙があるのに、「用紙なし」という警告が発せられたりもします。このままではどうにもならなくなるのではと心配して、修理できる業者をネットで探したところ、静岡の清水にあるエクストラという会社が、このプリンターを扱っていて、修理もしてくれるということでした。連絡しましたところ、このプリンターは何度かバージョンアップされて、最新型はバージョン4ですが、われわれの使っているのはバージョン2で、すでにサポートは終了しているといえます▼幸い、故障箇所は紙送りのゴムローラーで、これは新しいバージョンと互換性があり、何とか修理していただけましたが、ひやひやものでした。

木下 和久

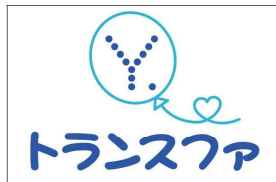
## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: [www.ytrans.net](http://www.ytrans.net)

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : [okada\\_tr\\_eib@ybb.ne.jp](mailto:okada_tr_eib@ybb.ne.jp)

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2022年7月15日です。